

Angels' Voice

「み手の中で、すべては変わる感謝に、
わが行く道に、現したまえ、あなたのみ手の業を」

聖歌 325 番



ルツ 原田 里香子

礼拝自粛が続く、演奏準備に追われることのない今、一人聖歌を口ずさむ時、その美しさ、力に癒され、心震える。歌は祈り。今は共に歌える日までの準備の時。

(5/11)

奥の細道…?

礼拝は、教役者を中心とし信徒の方々の様々な奉仕によって成り立っていますが、演奏については「誰でも OK」というわけにはいかない奉仕です。クリスチャン人口が 1%にも満たないこの国において、教会内で音楽やオルガンの専門家は極めて少なく「鍵盤楽器経験者」が「演奏を始める」というケースが多いようです。

「オルガンを弾いてくれないか？」と言われたのが今から 40 年前、私は「NO」と言えず、オルガンという楽器の事も、演奏奉仕の何かをも知らないまま、深く考えることもなく演奏を始めました。しかしそれは、木々に埋もれてよく見えない、曲がりくねった小道に誘われ、訳も分からず一人で迷いこんだようなものでした。

聖霊降る…?

当時は月～金曜日フルタイムで忙しく働いていたこともあり、演奏やオルガンの勉強どころか、たいした練習もせず礼拝に臨み、今から思えば「ただ音が出ただけ」の演奏を続けていました。

そんな私が変わられたのは、何年も後の米子聖ニコラス教会の英国製パイプオルガンとの出会いがきっかけでした。パイプオルガンの事を何も知らなかった私は、誰もいない広い聖堂の 2 階バルコニーで、パイプを見あげながら「一体この楽器をどうすればいいのか？」とただただ途方に暮れました。困り果てていた時、「オルガンを勉強しよう」という思いが胸に落ちて

きました。思いが「降りてくる」という感覚でした。

その後、教会でオルガンコンサートが開催され、用意されていたように一人のオルガニストに出会いました。すぐに指導をお願いした彼女はカトリックの信徒で、大学の後輩でした。

その後、様々な電子オルガン、パイプオルガンに出会いながら、演奏奉仕にとどまらず活動範囲は礼拝音楽全体の奉仕へと広がっていきました。

これが導き…?

神さまとの出会い方は人それぞれです。思いもよらない導きによって私たちはキリスト者になり、それぞれに役割が与えられ、教会を支える奉仕者の一人となっていきます。

奉仕は他者のために働くわけですから、当然自分の思い通りにはいきません。そこには課題、問題、困難が伴います。が、それらを通して悩み、考え、自分を見つめ、祈る方向に変えられました。特にやりたかったわけではなく、ただ断りきれなかったばかりにスタートした演奏奉仕でしたが、導かれた先には多くの恵みがありました。人の「思いや考え」はその人の「言葉や行動」に現れ、音楽にも「その人の思いや考え」が現れます。それに気がつく時、導きと恵みを祈らずにはいられません。

恵みの摂理

やればやるほど、奉仕、演奏、オルガンの世界の広さ、深さ、果てしなさに気づき、同時に自分の弱さ、至らなさを嫌という程思い知ることになります。自分が奉仕できるのは神さまの恵みがあってこそ、ということにも気づくことができます。

演奏奉仕に携われるのは限られた人数です。にも関わらずそれが許されるのは、偶然ではなく自分が選り取ったのでもない、神さまから一方的に与えられた必然の恵みなのだと思います。

私のような者が奉仕をさせてもらったこと、また共に学び、祈りと励まし、お力添えを下された方々に、心より感謝を申し上げます。

(パイプオルガン委員会・元委員長)

我が教会の音楽事情

～明石聖マリア・マグダレン教会編～

セバスチャン 大和 慎吾

明石聖マリア・マグダレン教会は、豊かな賛美あふれる教会です。音楽の賜物を与えられた信徒が多数おり、主日礼拝をはじめ、日曜学校やさまざまな行事で用いられています。礼拝では毎度「勝手に聖歌隊」という現象が起きています。ソプラノはもちろん、楽譜を見た瞬間アルトを歌う女性、テナーを歌う男性が複数いるのです。かく言う私も、楽譜を見た瞬間、「おお！このバスおいしいな」と思ったらバスを、「このテナーめっちゃきれいなハモリやん♪」と思ったら、気の向くままにテナーを歌います。

この聖歌の選び方は、年に数回、奏楽者と、音楽と聖書に通じている信徒数名でミーティングを開き、教会暦や説教の聖書箇所、当日に奏楽に当たる人の技量などを踏まえて、数か月先まで決めています。もちろん選ぶ人の好みも反映されます。数名のメンバーのそれぞれの好みなので、古典的な聖歌から新しいものまで、色彩豊かな選曲となっています。チャントは松本チャントを使用しています。毎回、会衆と奏楽者の息の合った歌声、いや、心合わせての賛美と祈りが会堂いっぱい響いています。奏楽者は5人ほどで、ほぼ1週ずつ交代で担当しています。幼いころからピアノをされてきた人、学生時代から本格的にクラシックのオルガンを学んでこられた人まで、それぞれの技量と持ち味で賛美をリードしています。奏楽の課題としては、技術的にはもちろん個人で反省点や目標を定めていると思います。潜在的に「実は私も鍵盤楽器が弾けます」という人もいるようなので、人材の発掘(?)も課題のひとつです。

日曜学校(牧羊幼稚園の園児・卒園生・保護者たちが出席、司祭と教会委員で奉仕)では私がオルガンを弾きながら子どもたちに対してソングリードをし、お話ししています(いのちのことは社『成長』に準拠)。聖歌集のほかにも、福音派でよく用いられる『友よ歌おう』や『プレイズワールド』といった歌集から、子どもから大人まで楽しめて内容もスッと入ってくる歌を用いています。私が仕事の関係で日曜学校の奉仕が出来ない場合は、礼拝の奏楽メンバー(日曜学校奉仕の教会委員)に子ども向けのオルガンを、司祭にお話

をしてもらっています。

音楽伝道としての行事も充実。7月の教会記念日には礼拝後に



会堂で合唱団コールマイスのコンサート、クリスマスやイースターでは複数の信徒が自主的に演奏活動を行っています。11月の子ども祝福礼拝の日は、礼拝後に私が顧問を務める神戸国際大学附属高校吹奏楽部の演奏会を牧羊幼稚園で開くことが定着してきました。

今年1月12日には明石の会堂にて、神戸国際大学のオルガニストでもあり、教区オルガニストの伊藤純子先生からオルガンレッスンをさせていただきました。本教会のほかにも、神戸伝道区内の教会から奏楽者が来られ、予め聖歌集から希望を出していた1曲ずつを伊藤先生に見ていただきました。十人十色、時代やジャンルはさまざま。それぞれの曲の時代やスタイルに合わせた、的確なアドバイスをいただくことができました。

これからも明石は賛美と祈りの発信基地として、地域に根差した伝道を続けていければと思います。

(明石聖マリア・マグダレン教会信徒)



聖歌のメロディによる祈り

～入門編 2～

同一低音の上に生まれる響き

前回は、音楽のスタイルを特徴づける「材料」とその「使い方」、そして「組み合わせ方」を理解することによって、即興やアレンジを効率的に学べることをお話ししました。そして「材料」の一つとして「6度の和音(ド～ラの音程)」を紹介しました(前回の原稿をもう一度参照いただけたらと思います)。

今回は「6度の和音」と特に相性のよい材料である「ペダルポイント」(以下PED)についてお話しします。「ペダル」といっても、必ずしも足鍵盤を使う必要はありません。PEDは、和音が変わっても特定の音を持続させていくテクニックのことであり、これは右手、左手、ペンを鍵盤に挟んだり、誰かに指を置いてもらうことによっても達成できます。

早速、聖歌のメロディーと PED を組み合わせてみましょう。右手で聖歌のメロディーを、左手、足、または鍵盤にペンを挟んで、持続する音を弾き続けてください。PED には2種類の基本的な使い方があります。

1. 曲の最初から最後まで主音（ドの音程）を弾き続ける（PED-1）
2. 最初は属音（ソの音程）で始め、最後の音で主音に進む（以下 PED-2）

神はわがやぐら（聖歌 453 番）



メロディーひとつひとつの音と、PED が作り出す和音を注意深く聞いてください。音の組み合わせによって、和音の音色が変わることを感じることはできますか？一般的に、心地よく聞こえる、1度（ド～ド）、3度（ド～ミ）、5度（ド～ソ）、6度（ド～ラ）、8度（ド～1 オクターブ上のド）の和音を協和音と呼び、2度（ド～レ）、4度（ド～ファ）、7度（ド～シ）の和音を不協和音と呼びます¹。これらの音楽用語は難解に聞こえますが、最も重要なのは用語を機械的に暗記することではなく、不協和音を作り出す「緊張」が、協和音にて「弛緩」するのを聞く、感じることができる「耳」を鍛えることです。「緊張」と「弛緩」が繰り返されるのが西洋音楽の最大の特徴であり、それを奏者がはっきりと認識、聞くことによって、メロディーと PED を組み合わせただけのシンプルなアレンジも、聴き手の祈りを支える立派な間奏となります。

次に、前回お話しした「6度の和音」を PED と組み合わせてみましょう。間奏としての役割を

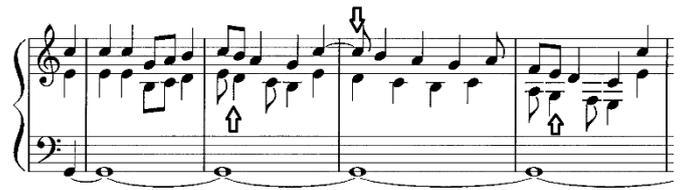


十分にはたすアレンジができました。色々な聖歌で試してみてください PED-1 と相性の良い聖歌、PED-2 と相性の良い聖歌があることに気付くかと思います。これは、聖歌の最初のソプラノの音によって左右されます。基本的に、ソプラノは、主音（ド）、3度（ミ）、5度（ソ）の音程のいずれかで始まります。「神はわ

がやぐら」の場合はソプラノが主音で始まっており、この場合は、PED-1、PED-2 どちらを使っても違和感はありませんが、例えば聖歌5番「主なる神よ」のようにソプラノが5度の音程から始まるときは、PED-2 を使った方がよいと思いませんか？

このように「材料」と「その組み合わせ方」、そして時折必要になる「調整」の仕方を、一つ一つ整理して、頭の中の引き出しにしまっていくことにより、いつしか鍵盤の前で無意識にそれらを用い、音楽を創り出すことができるようになります。これには長い時間がかかりますが、辛抱強く丁寧に学んでいくことによって、誰にでも即興やアレンジができるようになると断言します。

最後に、「6度の和音」の上級者向けの使い方をお話します。以下の譜例では、平行に動いている音を任意にずらしています。これによって、不協和音と協和音の緊張と弛緩が、ソプラノとアルトの間でも作られます。優れた西洋音楽では緊張と弛緩が何重の層にもなって起こっており、これこそが過去の偉大な作曲家達が表現していたものと言えます。



近年の研究で、過去の音楽家達は、上記のような方法で音楽を学んできたことが明らかになっています。このような学習法の中心は、音楽を創り出すために必要な「ルール」を根気強く学んでいくことにあります。この教育法に興味がありある方は「partimento」という用語を検索してみてください。または筆者まで気軽にお尋ねください。この2回の投稿が神戸教区の皆さまのお力に少しでもなれば嬉しいです。



執筆者

ダビデ 遠藤 陽平 Yohei Endo
立教大学在学中に、スコット・ショウ、三浦はつみ、崎山裕子、伊藤純子の各氏の下でオルガンの勉強を始める。その後渡米し、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で音楽

博士号を取得。現在イリノイ大学キャンパス内マッキンリー長老教会にて、音楽監督・オルガニストを務める。

¹ 協和音はさらに、完全協和音と不完全協和音に区分されます。また、それぞれの不完全協和音と不協和音は、長短の音程に区分されます。4度の音程は、完全協和音とも解釈できますが、実用的な音楽理論では、不協和音として扱います。

今、与えられる気付き

ミリアム 伊藤 純子

世の中が突然変わりました。いつも目の前の事柄に追われ続け、奏楽の準備に明け暮れていた日々が、夢の中の出来事であったのか、もしくは現状が夢の中なのか、頭がクラクラしているのは私だけではないでしょう。

奏楽の喜びをどこかで当たり前と感じ、余裕が無くなり、些末なことに心奪われ、音楽にまっすぐ対峙していなかった。そんなほんの少し前の自分を、恥ずかしく感じています。礼拝に与ること、礼拝で奏楽をさせていただくこと、歌を歌うこと、音楽に心を傾けること。このようなことは決して当たり前ではなく、その時その時の「ときになかった」神からのギフトであったのですね。

今、体感として重くのしかかるのは、「私にとって礼拝音楽って、何だったのだろう」「私にとって礼拝って、何だったのだろう」という問いです。

最近、各地の礼拝動画をインターネットで閲覧する機会があります。現地に赴く臨場感はないですが、毎日曜日の朝、六甲の自宅に居ながら東京へ、実際には不可能な瞬間移動を行いつつ3か所の礼拝を覗きまわり、同じテキストで同じ日本語なのに異なる空間を感じ、午後になるとイタリアのバチカンに飛び、広大な大聖堂で靈感満ち溢れる祈りの響きに包まれ、夕方には英国カンタベリーで静かな庭園の祈りに集います。

グレゴリオ聖歌から長い時を経て会衆賛美が誕生し、英国では詩篇の伝統から独自の文化が生まれたという歴史がありますが、これを心で丸ごと味わえる体験です。

会衆賛美の発展形として発生したのが、バッハのカンタータです。YouTubeで検索するとバッハのカンタータも簡単に聴けます。会衆賛美をただ歌うだけでなく、器楽も交えた組曲としてアレンジし、礼拝に献げたカンタータ。実際に聴くと理屈ではなく大切な気付きが与えられます。

職場のオルガンで聖歌を60曲録音しました。当然ながら、1曲ずつ音楽も歌詞も異なります。次々と録音しながら新たな発見がありました。そこで皆様にお勧めしたいことがあります。それは聖歌集を開いてページをめくりながら、この聖歌の

① フレーズの流れを味わい、歌詞をつけずに歌う。

音楽的展開や抑揚、曲想の個性を感じ取る。

② 歌詞のみを音読する。抑揚や句読点に忠実に、内容に関してイメージを膨らませて読む。

③ 上記①と②を同時に、その世界観を表現するつもりで、実際に声を出して全節を歌ってみる。

非日常が日常となり、窮屈な環境でナーバスになってしまう時もあります。「歌うこと」は天から与えられた賜物。このようなときにこそ、誰にも邪魔されない、何にも代えられない、万能なパワーを持っているのです！
(神戸教区オルガニスト)

オルガンレッスン報告 (2019年12月～)

★教区レッスン (会場の記載がない月は聖ミカエル大聖堂にて)

12月(7人)、1月(明石聖マリア・マグダレン教会/6人・聴講4人)、2月(6人)

★神戸聖ミカエル教会レッスン

12月～2月

*3月以降は新型コロナウイルス感染拡大防止の為、レッスンを中止しています。

行事報告

2月9日(日)16時から聖ミカエル大聖堂にて、2月に神戸伝道区を離れられることとなった原田里香子姉、瀬山みちる姉のこれまでのお働きに感謝し、新しい場所でのご活躍をお祈りする礼拝が行われた。司式は聖ミカエル教会の河村司祭と遠藤執事、奏楽は教区オルガンレッスン受講者有志。神戸伝道区各教会のオルガニストや聖歌隊関係者などが集まり、聖書の朗読とお祈りと共に7曲の聖歌をお捧げし、お二人からのメッセージに耳を傾けた。



パイプオルガン会報紙事務局 (神戸教区事務所)

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目11番1号

☎078-351-5469 fax(078)382-1095

Email:aao52850@syd.odn.ne.jp

会報誌編集人

ステパノ 江見 龍太郎 (神戸聖ミカエル教会信徒)

ハンナ 塚田 恵里 (神戸聖ヨハネ教会信徒)

マリア 福島 薫 (神戸聖ペテロ教会信徒)